

# 史料を活かす—経済史研究の心得

経済学部 教授 橋口勝利 はしぐちかつと

「史料がないので、これ以上はできません」

今から20年ほど前、学会発表での私の発言です。思い返しても、冷や汗をかきような大失言でした。この場で発表者だった私に、討論者のA先生から厳しい指摘を受けたあとの発言でした。

息つく暇もありません。すぐさま大声が飛んできました。それは、A先生からのお叱りの一言でした。

「史料がなくても、研究はできる！」

ほんの一瞬の出来事でした。

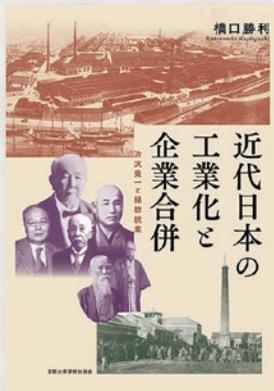
経済史研究では、史資料の活用はとても重要です。大学図書館や研究機関で文献資料や統計資料を集めますが、現地へ足を運んで取材もします。そこで経営一次史料を入手できれば大成果です。A先生はこの研究手法の第一人者でした。冒頭の発言は、その調査の限界をA先生に伝えるために発したものでした。ですからA先生の言葉はとても意外で、頭が混乱したことをよく覚えています。

しかし、考えてみれば理由は簡単でした。私は、研究が進まないことを「史料のせい」にしていたのです。A先生は、「今、自分が持っている史資料を大切にすること」を伝えたかったのです。私は、未発掘の史料を見つけることにとらわれすぎて、手元の資料を軽視していたのです。

それからは、文献やデータ、営業報告書や業界誌のメッセージをよりいっそう考え、現地取材を重ねて検証を繰り返しました。すると地域新聞やパンフレット、地図、写真、地形、まちなみ、すべてが貴重な資料として躍動し始めました。気がつけば、研究成果は目にみえて増えました。

もつと不思議なことがありました。なんと、各地域に眠っていた経営一次史料が相次いで入手できるようになったのです。まるで「史料の方から集まってくる」、そんな感覚です。

2022年3月、その研究成果をとりまとめ、『近代日本の工業化と企業合併—渋沢栄一と綿紡績業』（京都大学学術出版会）を発表しました。もう70歳近くのA先生からは、「私もまだ研究を続けます。もう少し競争しましょう」とのメッセージが届きました。A先生との出会い、これからもずっと大切にしたいと思えます。



著書『近代日本の工業化と企業合併—渋沢栄一と綿紡績業』（京都大学学術出版会）

談話室

室

教員によるエッセイコーナー